

2023 年度イラン短期研修プログラム報告書

テンプル大学ジャパンキャンパス

教養学部 国際関係学科・政治学科 3年

川添 菜央

1. はじめに

2024年2月10日から2月22日に行われたイラン短期研修プログラムでは、笹川平和財団、イラン国際関係学院 (School of International Relations; SIR) によるご支援の下、イランの首都であるテヘランや、地方都市であるエスファハーン、ヴァルザネ、カーシャーンなどで歴史的建造物の視察や外務省などの政府機関を表敬訪問し、イランについて新たな視点で学ぶことができた。本報告書では、研修前からの調査目標であった「イランの視点から考える」と「自分の目で見て学ぶ」に重点を置いたうえで、1. 外交、2. 国民性、3. 現地で感じた「事前認識」との乖離、の3点からの学びを述べたいと思う。アメリカに留学経験があり現在も米国大学の日本校に通う私にとって、イランの政治や文化をイランの視点から学ぶことや現地で自分の目で見て学ぶことは、今までの学習を通じて形成された私の「イラン観」がいかに欧米的視点に偏っていたかを認識することができ、とても興味深かったとともに、改めて中立的な立場から物事を見る難しさを実感した。

本報告書で述べることは執筆者個人の見解であり、また本研修中に交流することができた大多数はイラン国民の上・中流階級にあたる人々であることから、必ずしもここで述べる全ての見解がイラン社会を包括的な目線で見ている訳ではないということはあらかじめ明記しておく。

2. イランの視点で語られるイラン外交

SIR では Dr. Sajjadpour による「イラン外交を理解する上での理論的枠組み」の講義を受講した。講義の中で強調されたのは、イランを本当に理解するために必要な理論的枠組みの一つでもある、“Universality (普遍性) and Particularity (独自性)”であった。普遍性というのは「すべての国に当てはまるもの」という考え方で、彼はイランの外交の姿勢について、「すべての国が自国の利益を追求するように、イランもそうしているだけだ」と述べた。一方、独自性というのは「各国それぞれの独自の背景に基づくもの」という考え方で、彼は「イランは長い歴史の中で、他国からの侵略や介入をされたという経験、イラン・イスラーム革命で誕生した強いアイデンティティ、更に周囲を15カ国に囲まれているという地理的要因があるので、それらも他国に理解してもらう必要がある」と私たちを見て言った。欧米諸国のメディアでは「核開発を進める危険な国」という扱われ方をされることも珍しくないイランだが、イラン側の視点から考察するならば、イランは他国と同じように自国の安全と繁栄を求め、周囲を15カ国に囲まれている地理的独自性や、他国からの侵略や権力に対する革命の歴史的独自性に基づいた自衛方法をとっているにすぎないのかもしれない。テヘラン滞在中に訪れたテヘラン平和博物

館で核兵器や化学兵器の根絶を願った展示を見た際には、(表向きには核の平和利用という目的だが)核開発を進める国の方針と市民の考えに多少なりとも溝を感じたが、そこにこそイランの普遍性(自国を守りながらも他国同様世界平和を願う姿)と独自性(数々の国から自国を守らなければならないという特色)があるのだと私は解釈する。

3. 実体験したイラン文化と国民性

滞在中に「これがまさにイラン文化！」と感動した瞬間が何度もあった。イラン人のおもてなし精神が旺盛なことや、彼らがいかにフレンドリーな性格であるかは事前学習やイラン滞在経験がある友人から聞いていた。しかし実際に受け入れ先で出していただいた驚くほどの量の食べ物や客を歓迎する意味で出される「おこげ」を目の当たりにしたり、テヘランやエスファハーンを散策しているときに、一般市民の方々から何度も声をかけられ、時に一緒に写真を撮ってほしいと言われ、皆が言っていたイラン文化の意味を本当に理解した。また時にはおせっかいとまで言えてしまう彼らの面倒見の良さには、イランの「人を大切にする文化」や彼らの人柄の良さが垣間見えた。

また、イランには「ターロフ」という日本でいえばお世辞のような文化がある。イラン滞在初日に小さなドラッグストアのようなお店に買い物に行ったとき、店主が商品をすべて袋に入れた後「お代は要らないよ」と言っているのを聞いた。ターロフという文化は事前に知っていたものの、やはりその瞬間は「これが噂の！」と興奮せずにはいられなかった。

とても気さくで優しく、おちゃめで少しおせっかいでもある魅力的なイラン人や、ターロフなどの独自のイラン文化に触れ楽しく快適な滞在となった。一方で、こうした国外ではあまり知られていないイランの美しい文化や国民性を現地でしか知ることができず、日本や他国では「イランは危険な国」とネガティブな印象を持たれていることにもどかしさとやるせなさを覚え、イランの情報をより多面的に、日本をはじめとする他の国々に発信していくことが私の使命だと感じた。

4. 現地において感じた事前認識との乖離

わずか10日という短い滞在期間であったが、それでも渡航前に想像していたイランと実際のイランの政治文化、経済、宗教はかけ離れていたところが沢山ありとても興味深く勉強になった。

▶ 対米感情

SIRで講義をしていただいたDr. Sajjadpourと話しをする機会をいただいたとき、彼は私たちに得意の「アメリカンジョーク」の数々を披露してくれた。彼の人生についてお話を伺ってみると彼はアメリカでの留学経験と勤務経験があり、さらに彼の息子は現在ニューヨークで働いているとのことだった。また、将来外交官になるであろうSIRの学生も含め、イランの政府高官や未来の政府関係者も英語が堪能だったことに驚いた。これらのことから(もちろん英語は

アメリカだけで話されているわけではないが)、イランは「アメリカとの対立関係にも拘わらず、政府関係者、特に上層部の高官は、個々人レベルでは米国に対しての親しみも感じているようだ」というなんとも意外な発見をした。ミラード・タワーというテヘランにあるイランで一番高いタワーを訪れた時も、アメリカの Subway のオフブランドと思われる Freshway を発見し、最大級の商業施設であるイランモールには偽物と思われる ZARA のイヤリングが売られていた。イランの経済力を象徴する施設の中には米国を真似たブランドたちがあることから、国同士の諍いはあれど外の世界やメディアから言われているほど国民レベルの反米意識は強くないと推察した。

▶ イラン経済

さらに、イラン経済について現地で感じたことも、私の予想とは異なった。イランイスラム革命をきっかけに始まった欧米諸国の兵糧攻めのような経済制裁だが、イラン(特にテヘラン)滞在中は幾度となく、経済制裁を受けている国とはとても思えないほどの経済発展を象徴するかのよう光景を目にした。先ほど挙げたミラード・タワーやイランモールの他にも、イランで一番大きなテクノロジー施設であるパーディス・テクノロジー・パークでは最先端の医療開発やエンターテイメント目的のゲーム開発が行われていた。もちろん本研修では国家事業規模の施設を視察することがほとんどだったので、イラン全土において同じことが言えるわけではないが、(町中には窓がなかったり倒壊しそうな建物もあった)厳しい経済制裁に耐えるイランの底力に心底感服した。また、経済制裁によって外国資本や商品が国内に入ってくる状況は、ペルシャ絨毯をはじめとするイラン国内の手工芸産業を維持する一助にもなっているのかもしれない。

▶ ヒジャブの着用

乗り換えのドバイ国際空港からイマーム・ホメイニー国際空港に向かう飛行機の中で、イラン人女性と会話することができた。「いつヒジャブを着けるべきなのか、どう着けるのが正解なのか」と緊張している私を、彼女は「イランでは最近の女性はもうほとんどヒジャブはしていないから肩にかけるだけで十分。何も心配することはないよ」と少し笑いながら元気付けてくれた。実際、いざ現地に降り立ってみると、大多数ではないものの、ヒジャブをしていない女性の姿も見られた。都市部のテヘランとは違い、ヴァルザネやカーシャーンなどの地方都市や、モスクなどの宗教建造物内ではやはりヒジャブやチャドルを被った女性が多かったが、それでもヒジャブの着用が法律化されている国で着用をしていない人が私の予想を上回る数いることに驚きを覚え、大学で学習したことや、日本国内での一般的な認識とのギャップを感じた。

▶ イスラム教に対する認識

テヘランではエマームザーデ・サーレフの見学をし、その際にイスラム教シーア派教徒の温かい一面を知ることができた。聖者廟では一面がガラスで囲まれた壮麗な空間が広がっており、人々が願い事をしに集まっていた。聖者廟の中では、悲しいことがあったのか膝から崩れ落ちながら咽び泣く女性の姿もあった。イスラム教シーア派には、願い事がある人が聖者廟を

訪れ、願いが叶うと周りの人にお菓子などのプレゼントを渡す習慣があるらしく、私たちも願い事が叶ったという女性からお菓子や髪飾りをいただいた。今までの私のイスラム教に関する認識はほとんどが米国のメディアや論文を通じて形成されたものであった。今回の研修旅行でイスラム教の本当の習慣やイスラム教徒の温かさに触れることができ、改めて現地で「自分の目で見えて考える」ことの大切さを実感した。また、「イスラム教は少し怖い」という先入観からイランを見ている人たちに対し、本当のイスラム教の温かさも伝えていきたいと、帰国後の目標を設定することもできた。

5. おわりに

本報告書では冒頭にも記したように、「イランの視点から考える」と「自分の目で見えて学ぶ」に重きを置き、政治、経済、文化、宗教の観点からの見解を述べた。中東の国を訪れたことは私にとって初めての経験であり、いかに自分の思考が西洋諸国視点に偏っていたか気付かされたとともに、イランの世界観や価値観に触れることができた実に有意義で貴重な時間であった。

最後に、パレスチナ問題激化などの不安定な状況の中、イラン政府の意思決定や外交政策に関わる方々から直接お話を聞き、対話の機会を与えてくださった笹川平和財団の皆様、日本から引率していただいた笹川平和財団の横山隆広さん、木村明日美さん、現地コーディネーターの穴田慶子さん、研修の企画や現地での引率を担当してくださった SIR の皆様に厚く御礼申し上げます。

(なお、本所感は執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません)